

滞佛研鑽考——小野政吉・敏郎父子の事例

田 中 貞 夫

小野政吉がフランスへ留学したのは、明治5年(1872)6月20日(新暦、以下同じ)^(註1)、彼が八歳の時のことである。おそらく我国最年少の佛国留学生の一人といっても、過言ではなからう。ところで、この様な年端も行かぬ児童が、如何なる事情で、海外へ渡航する事になったのであろうか。この点から考えても、少なからず興味がある問題である。

政吉は田和仁兵衛の長子として、山城国の下鴨村(現在の京都市左京区)に誕生した。元治元年(1864)12月28日のことである。後に小野善右衛門(伯父)の養子となるが、善右衛門の要請により海を渡るようになった。

よく知られている様に、当時の留学生の多くは、明治新政府の希求を反映して、国家に貢献する人材の育成が大きな目標であった。それ故、各人の目的が一応達せられると、すぐさま帰国し、研鑽してきた学問を生かして、活躍するのが常であった。

ところが、小野政吉の場合は、あまりにも若年で外国に出かけた為か、長くフランスに止まり、子息(敏郎)もまた彼の地で生活をし、学業を修得する結果となった。やはり当時としては珍しい例といえようが、これが唯一の事例と考えるのは早計であろう。例えば、本野家三代のフランス留学が他に存在するからである^(註2)。

しかしながら、官費留学生でもなく、雄藩出身でもなく、かつまた門閥にも属さない一少年の、フランス留学生活とは、一体如何なるものであったのか。日本フランス学研究の上でも逸する事の出来ない人物であろう。

1.

政吉の伯父・小野善右衛門は、幕末維新期における商業界の風雲児で、豪商・小野組の屋台骨を背負った人物である。激動する時代の中で頭角を表わし、しかも商才が卓抜していたが故に、その行動は唯我独尊となり、強いては小野組を破滅の道に導く結果になる。しかし、善右衛門は小野姓を冠しているが、小野一族の血縁に繋がりは無く、子飼の番頭上りの者である。

さて、ここで小野組について簡単に触れておくと、上方商人にはよくある例であるが、近江の出であり、高島郡大溝が小野一族(本文に関連のある善助家を中心に記す)の発祥地である。

「大溝小野家の初代新四郎則秀^{のりひで}は万治年間から陸羽の物産を、京都・大阪および近国の物産と交易していたらしい。その二男主元^{しゅげん}は寛文二～三年ごろ盛岡にくんだり、村井新七方をたより、のち、新七の別家となって、村井姓をなのって村井権兵衛といい、近江屋と称した。村井新七は慶長一五年すでに奥州南部遠野に來り、盛岡に居をしめ、つづいてでてくる近江商人の『草鞋脱場』となっていた。すなわち、後来の近江商人はここに來着し、ここを根拠にして発展したものらしい」^(註3)。

村井権兵衛は故郷・大溝から甥の善助を呼びよせて、盛岡に開店(屋号・井筒屋)させた。その後、善助は京都に進出し、手広く商品を扱い、益々大店になっていった。江戸にも出店をだし、

明治維新の頃には、三井組、島田組と並んで新政府に財政的援助をし、御為替方と称される程になる。

小野組は維新後になって、より一層繁栄したかに思われたが、政府の政策によって、今まで得た特権は大きく修正を余儀無くされる。明治6年(1873)のことである。同17年(1884)、小野組はその権利を小野商会なるものに移して、実質的に小野組としての活動を終了した。

なお、小野組をこの様に隆盛にみちびき、その一方、破綻させる原因を作った、政商・小野善右衛門とは一体いかなる経歴の持主なのか。

善右衛門は文政9年(1826)、山城国下鴨村の生まれで、田和家の長子である。当主は代々、仁兵衛と名乗る程の農家であったが、すでに家運は傾きかけていた。幼少時の名は長之助であるが、長じては^{としきた}勺貞と改名した。天保7年(1836)、家督を弟に譲り、商人として自立すべく、京都の小野店に丁稚奉公に上った。嘉永5年(1852)には江戸店を改革し、安政6年(1859)には、盛岡店が盛岡藩から追放処分を受けた際、その解決策を構じて、大いに手腕を發揮する。万延元年(1860)の4月、今までの功績が認められてのことか、小野家の別家である西村姓を許されて、西村勘六と名乗ることになる。

これ以降、勘六の独断専行は激しくなり、元来、小野三家の大番頭の役名であった善右衛門を勝手に名乗り、西村善右衛門と称した。明治4年(1872)の戸籍法の制定に際しては、いち早くこれを本名として届出で、正式に西村善右衛門と登録した。その後、一人娘(産)に養子を貰い、娘婿(増田作次)に西村家を継がせ、自らは西村姓を去って、小野姓を呼称する。

「当初、宗家善助は病弱の身であったから、家事の統轄を勘六に委任したのであったが、今全然主権を奪われたような形になったので、三家の主人は額をうつめて、身の腑甲斐なさを歎くのみであった。かくて、内外の心ある人々は、勘六の僭越不遜な行動に眉をひそめ、……」(註4)。

善右衛門がこの様な人物であったことは、否定出来ない事実であるが、これも激動の時代なればこそ、やむを得ない事なのであろう。何故なら、これを武士階級に置換るなら、こうした例は枚挙に遑が無いからである。

2.

明治5年、横村正直京都府大参事が民間(三井、島田、小野)からの海外留学を奨励したので、小野組でも留学させることになった。

他組に対しての均衡上、小野善助(小野組本家)の長男(善次郎)と、善次郎の弟をイギリスに派遣することを考えたが、弟は病弱の為、断念せざるを得なかった。そこで、善右衛門の甥(政吉)が選ばれ、フランスに渡る経緯は、前述の通りである。その他、小沢信太郎(註5)が急遽同行することになった。

なお、これから5年後の明治10年(1877)3月、横村京都府知事は公費の留学生をフランスに送っている。かつての京都府仏学校教師、レオン・ジュリー(Léon Dury, 1822—1891)の進言によるものであるが、その目的は京都府の産業振興を計るためであった。ジュリーによって選ばれた留学生は、師範学校から3名、中学校から1名、仏学校から4名の、総計8名であった。彼等は帰国するレオン・ジュリーに伴われて、勇躍海を渡るのであるが、それ等の中には、稲畑勝太郎はじめ後年世に名をあげた者が多い(註6)。

ところで、小野政吉の留学先をフランスではなく、スイスとする記述も見られるが(註7)、これは明らかに間違いであろう。何故なら、政吉の仏国での経歴から考えても、こうした見解は決して正しくないからである。実は、小野政吉の渡航に際しては、横浜のシーベル商会(Siber & Brenwald, スイス人の貿易商)に色々世話になった。その関係上、同商会からは留学先をス

イスにするよう勧められたが、生糸貿易を重視していた善右衛門の一声で、佛国に決定したという経緯がある。

上述の如く、小野政吉は同行五名の中の一員として^(註8)、明治5年の6月20日、仏国郵船会社メサジュリ・マリタイム (Messageries Maritimes) 所属のゴダバリ号 (Godavari)^(註9)で横浜を出航したが、7月4日に香港にて、アルフェ号 (Alphée) に乗りかえて、目的地マルセイユに到着したのは、同年8月20日のことであった。およそ2ヶ月の船旅である。

マルセイユからパリまでの交通機関は、汽車を利用したが、車窓の田園風景とは裏腹に、パリは市街戦 (パリコミューン) の跡をまだ色濃く残していた。

小野政吉と小沢信太郎の両名は、寄宿舎を兼ね備えている私立・オルチュス学院 (Institution HORTUS, 94, rue du Bac, パリ7区) に入学した。政吉達の入学動機は不明であるが、おそらくこの学校が外国人に広く門戸を開放していたことが、最大の理由であろう、と考えられる。この私立学院にはすでに2名の日本人生徒が在籍していたらしく、入江文郎 (当時の佛国留学生総代) の「留学生名簿」には、次の名前が見出される。

榎本彦太郎 申二十歳
 仏国着 明治五年四月十五日
 学科 鉱山学
 当時所学 普通学
 教師 ヲルチュス塾

新納武之助 同十六歳
 仏国着 千八百六十六年十一月廿九日
 学科 未定
 当時所学 普通学
 教師 オルチュス塾

ところが、不思議なことに、この名簿の中には小野政吉の名前が見当らない。その理由は不明だが、年があまりに若年なので、留学生として取り扱われていないのか、とも考えた。しかし、その理由を年齢の問題として捉えるだけでは、解決出来ないようである。何故なら、同名簿には政吉とほぼ同じ条件の者 (幼年であり、しかも自費留学生) が明記されているからである。

蜂須賀萬亀次郎 申九歳
 仏国着 明治五年三月十九日
 学科 幼年ニ付未見留無之
 当時所学 普通学
 教師 マール氏

明治初期の佛国留学生といえば、ごく限られた人数であり、しかも同名簿には、在校名および住所まで詳細に記載されている。それ故、すでに報告したものであるが^(註10)、当時の留学生事情を把握する上で、貴重な史料と思われるので、ここに再び紹介しておくことにする。

3.

入江文郎の直筆による「留学生名簿」は、入江尚子氏旧蔵のもので、和紙に縦に書かれているが、記述の都合上、本稿では横書きにしたことを付記する。寸法を記しておく、縦25cm×横18がその大きさとなる。

なお、() の中には、筆者の追跡調査によって判明したものであるが、留学生の住所が書かれた史料(入江尚子氏旧蔵)も入手することが出来たので、< >の中に示しておいた。そこに記された住所は正確さに欠く個所もあるが、文郎の直筆でもあるので、そのまま記載しておく。

1. 官費之分

西園寺望一郎 申二十四歳

仏国著 明治四年二月六日

学 科 制度学(政治学)

当時所学 普通学(一般教養)

教 師 ミルマル氏

<Institution Marc. 53, rue des Dames. Batignoles>

(のちに公望。出身地、京都。公家華族。明治法律学校教員、東洋自由新聞社長・主筆、各国公使、文相、首相。)

石丸三七郎 同二十三歳

同 明治三年十一月廿八日

同 築 城(築造学)

同 普通学

同 ニース政府学校

(兵学寮生徒、出身地、岡山。)

小坂勇熊 同二十三歳

同 同

同 隊外士官業務(参謀学)

同 普通学

同 サンルイ学校

(のちに、千尋。出身地、岩国。兵学寮生徒。陸軍大学教官。陸軍省軍務局第一軍事課長兼陸軍省参事官。陸軍歩兵中佐。)

樽崎頼三 同二十六歳

同 同

同 軍事刊法

同 普通学

同 ミルマン氏

(兵学寮生徒。出身地、山口。パリにて明治8年2月17日病死。)

堀江提一郎 同二十六歳
 同 同
 同 同
 同 普通学
 同 コルネーイ氏
 (兵学寮生徒。招魂社司。)

船越熊吉 同十九歳
 同 同
 同 大砲 (砲兵学)
 同 普通学
 同 サンルイ学校
 (兵学寮生徒。出身地、広島。)

野村小三郎 同十八歳
 同 同
 同 隊外士官業務
 同 普通学
 同 デカルト学校
 (兵学寮生徒。出身地、岡山。パリで死亡。)

小国 磐 同十七歳
 同 同
 同 士兵学 (築造学)
 同 普通学
 同 (仏国政府学校)
 (兵学寮生徒。出身地、岩国。陸軍大学教官。陸軍少将。)

駒留良蔵 同
 同
 同 法律学
 同
 同
 <M. Koma-Tomé. 16, rue Lord-Byron>
 (出身地、沼津。警視庁准奏任御用掛。長崎控訴院検事。)

安藤直五郎 同
 同 明治五年四月
 同 兵学
 同 普通学
 同
 <Institut. Preyset Desboeufs. 19, rue Masurel (à Lille)>

前田弘庵 同二十四歳
 同 明治三年正月十二日
 同 農 学
 同 普通学
 同 クェー学校

<Institut. à Couché (dépt. de Vienne)>

(のちに正名。出身地，鹿児島。外務，内務，大蔵省に歴任。山梨県知事。元老院議官。貴族院議員。)

西直八郎 同二十三歳
 同 千八百七十一年三月二日
 同 兵 学
 同 普通学
 同 マルク氏

(出身地，鹿児島。)

岩下長十郎 同二十歳
 同 千八百七十一年四月十六日
 同 未 定
 同 普通学
 同 フブール氏

(出身地，鹿児島。砲兵大尉。)

渡六之助 同二十五歳
 同 明治三年三月一日
 同 兵 学
 同
 同 陸軍大兵学校サンシール

(のちに正元。出身地，広島。陸軍少佐。参謀局諜報提理兼幼年学校次長。大政官書記官。元老院議官等を歴任。貴族院議員。著書に『巴里籠城日記』。)

河津祐之 同二十四歳
 同 明治五年四月廿六日
 同 究理学 (物理学)
 同 普通学
 同 デマレー氏

(編輯寮六等出仕。出身地，静岡。元老院大書記官。東京上等裁判所詰検事。司法大書記官。函館控訴院検事長。通信次官。訳書に『佛国革命史』)

熊谷直孝 同二十三歳
 同 同
 同 化学

同 普通学

同 ボンネー氏

<Institut. Harent. 9, rue de Jouy>

(造船寮九等出仕。出身地, 京都。京都府権中属。)

稲垣喜多造 同二十四歳

同 千八百七十一年十月三十日

同 算術英仏語学

同 ボンネー氏塾

(工部省, 工作局造船技師・主船寮中師。横須賀造船廠所技師。)

長谷部仲彦 同二十三歳

同 明治五年五月十一日

同 工 学

同 普通学

同 ギベール氏

<Chez M. Silvestre Léon. 8, rue de Tarente>

榎本彦太郎 同二十歳

同 明治五年四月十五日

同 鉦山学

同 普通学

同 ラルチュス塾

<Pension Hortus. 94, rue du Bac.>

山口彦次郎 同十七歳

同 同

同 農 学

同 普通学

同 ルノワール氏

<Institut. Marc. 53, rue des Dames. (Batignoles)>

松原且次郎 同十八歳

同 千八百七十一年三月十四日

同 (ブリツキセール着)

同 鉦山学

同 普通学

同 ラヒット氏

<Institut. Harent. 9, rue de Jouy>

(南校生徒。出身地, 金沢。)

古賀護太郎 同二十三歳

同 同

同 鉾山学
 同 普通学
 同 シュールド氏

<Instit. Harent. 9, rue de Jouy>

(のちに袋久平。南校生徒。出身地、佐賀。)

中江篤助 同二十六歳

同 明治五年正月十一日
 同 刑法学
 同 普通学
 同 パレー氏

<Instit. Reusse. rue du Cardinal le Maine>

(のち兆民。南校助教。出身地、高知。外国語学校長。元老院権少書記官。衆議院議員。
 「東洋自由新聞」主筆。著(訳)書多数。)

河内宗一 同二十四歳

同 同
 同 同
 同 普通学
 同 ブランション氏

<Chez M. Winter. Institution Parc-de-Neuilly, Neuilly>

大田徳三郎 同

同
 同
 同
 同

(出身地、広島。陸軍省七等出仕。砲兵大尉。大阪砲兵工廠監務などをへて陸軍中将。)

柏村庸之允 同(廿二歳)

同 (午ノ十一月廿八日)
 同 (砲兵学)
 同
 同 (仏国政府学校)

(兵学寮生徒。出身地、山口。)

大山 岩 同

同
 同
 同
 同

(大山巖。通称弥助。出身地、鹿児島。陸軍士官学校長。内務大輔大警視。議定官。陸軍卿。
 参謀本部長。陸軍大臣。海軍大臣。文部大臣。枢密顧問官等の顯官を歴任。陸軍元師。)

山中一郎 同

同

同

同

同

(出身地, 佐賀。政治経済学を修学。佐賀の乱で処刑される。)

松田正久 同 (廿七歳)

同

同 (軍事刑律)

同 (普通学)

同 (マルク塾)

(西周塾生。出身地, 佐賀。軍事学を修学せず, 政法に転じたため帰国を命じられる。検事。鹿児島造士館教頭。文部参事官。長崎県会議長。衆議院議員。大蔵大臣。文部大臣を歴任後, 衆議院議長。)

曾根荒助 同

同

同

同

同

(大阪兵学寮幼年舎。陸軍経理学を修学。出身地, 山口。士官学校出仕並太政官少書記官。法制局参事官。衆議員書記官長。衆議院議員。各国公使を歴任。その後, 司法大臣, 農商務大臣, 大蔵大臣, 臨時外務大臣となり, 統監。)

長嶺正介 同 (十八歳)

同 (申ノ十月廿日)

同 (歩兵学)

同

同 (仏国小学校在留)

2. 県費之分

飯塚 納 申二十八歳

仏国費 明治四年五月廿五日

学 科 法律学

当時所学 普通学

教 師 デヌビール氏

学 費 千 金

<Chez M. Dlahausse, à la Sorbonne. 15, rue de la Sorbonne par l'escalier 5>

(出身地, 鳥根県。「東洋自由新聞」副社会。詩人。黒竜会。)

山田虎吉 同十九歳
 同 明治三年十一月廿九日
 同 製造学
 同 普通学
 同

<Institut. Galtier. 104, rue Amelot>

(または寅吉。出身地，豊津。エコール・サントラルにて土木建築学を修学。工博。)

山口建五郎 同二十三歳
 同 明治四年六月廿八日
 同 鉦山学
 同 普通学
 同 ルノワール氏
 同 千 金

<Institut. Massin. 12, rue des Minimes>

(致遠館に学ぶ，出身地，伊万里県。)

浅田逸次 同二十二歳
 同 同
 同 医 学
 同 普通学
 同 ベナル氏
 同 千 金

<20, Avenue du Bel-tir. ? Chey M. Silvestre. pension du Trône>

(出身地，伊万里県。)

福地鷹次 同二十歳
 同 同
 同 法律学
 同 普通学
 同 ボンネー氏
 同 千 金

<Chez M. Bonnel. 26, Bd de la Reine, Versailles>

(出身地，伊万里県。)

大塚琢造 同二十二歳
 同 同
 同 兵 学
 同 普通学
 同 メニール氏
 同 千 金

<Institut. Prétel. 69, rue de Clichy>

(致遠館に学ぶ。出身地，伊万里県。外国貿易並びに博覧会審査官。大正博覧会協会理事。)

黒川誠一郎 同二十五歳
 同 千八百六十九年四月
 同 法律学 巴里法律大学校ニテ修業
 学費 八百四十ドル

<26, rue Monge>

(出身地, 石川県。司法少書記官。司法大書記官。外務大書記官兼外務書記官。無任所公使館参事官。行政裁判所評定官。)

清水金之助 同二十八歳
 同 千八百六十九年七月二日
 同 器械学
 同 普通学終り最上等学
 同 アラン氏塾
 同 八百ドル

<Institut. Harent. 9, rue de Jouy>

(誠。金之助は通称。工芸大学に入学。出身地, 石川県。東京でマッチ会社「新燧社」設立。)

岡田丈太郎 同十六歳
 同 千八百六十九年七月二日
 同 鋳山学
 同 普通学
 同 クンチアン学校
 同 五百ドル

<Pensionnat des Frères à Passy>

(出身地, 石川県。)

小笠弥一 同二十六歳
 同 明治四年五月
 同 化学
 同 普通学
 同 ジビノー氏塾

<22, rue Maronnière>

(出身地, 静岡県。)

庄司金太郎 同十九歳
 同 明治三年十一月廿八日
 同 海軍 (築造学)
 同 普通学
 同 ニース学校

<Lycée de Nice, Nice>

(出身地, 島根県。)

3. 自費之分

蜂須賀万亀次郎 申九歳

仏国著 明治五年三月十九日

学科 幼年ニ付末見留無之

当時所学 普通学

教師 マール氏

<Chez Mlle. Sébirot. 199, route d'Orléans au Grand Montrouge>

(式部官。)

池田 登 同二十三歳

同 同

同 器械学

同 普通学

同 ボンネー氏塾

<Chez M. Damarc, Instit. à Jgny (S.et O.)>

村上四郎 同二十五歳

同 明治三年十一月廿八日

同 工学

同 普通学

同

<Chez M. Bénard. rue de Paris à Palaiseaux (S.et O.)>

(出身地, 山口県。)

中島精一 同二十二歳

同 明治五年正月十四日

同 器械学

同 普通学

同 シウエー氏塾

(出身地, 石川県。)

前田利同 同十七歳

同 明治五年二月廿四日

同 兵学

同 普通学

同

(外交官。式部官。宮中顧問官。)

江藤彦夫 同二十三歳

同 明治五年三月十九日

同 器械学

同 普通学

同 ミケール氏

毛利藤内 同二十二歳
 同 明治三年十月廿八日
 同 法律学
 同 普通学
 同 ベナール氏
 <Chez M. Bénard. rue de Paris à Palaiseaux (S.et O.)>
 (大阪で仏式兵法伝習。出身地, 山口県。第百十銀行頭取。)

新納武之助 同十六歳
 同 千八百六十六年十一月廿九日
 同 未定
 同 普通学
 同 オルチュス氏塾
 (または次郎四郎。出身地, 鹿児島県。)

三刀屋七郎次 同二十七歳
 同 明治五年二月二十日
 同 未定
 同 語学
 同 カンール氏
 (出身地, 山口県。)

中村雄次郎 同二十一歳
 同 明治五年九月
 同 兵学
 同 普通学
 同 ガルニエ氏
 <Chez M. Garnier. 20, Bourg de Reine. Instit. Garnier>
 (出身地, 度会県。砲兵中尉。)

津田震一郎 同二十二歳
 同 同
 同 兵学
 同 普通学
 同 ガルニエ学校
 <Chez M. Blanchan. au Vésinet>
 (出身地, 和歌山。)

小田均一郎 同
 同
 同

同

同

(出身地, 松江。元藩執政。)

坂田乾一郎 同

同

同

同

同

同

浦島健蔵 同二十一歳

同 明治五年八月五日

同

同

同

新田静丸 同

同

同

同

同

同

多田弥吉 同

同

同

同

同

同

(出身地, 和歌山県。砲兵中尉。大阪府鎮台予備砲兵第二大隊第二小隊予備隊長心得。陸軍中尉。田原坂にて戦死。)

その他, 入江文郎の「西航備忘録」にも, 留学生の名前が記載されている。参考までにそれを記してみると, 栗本貞次郎 (静岡), 三浦十郎 (佐土原), 桂太郎, 吉武彦十郎 (山口), 戸次正三郎 (柳川), 前田壮馬 (高知), 小倉衛門介, 周布金鐘, 光田三郎 (山口), 大黒屋幸蔵, 中山譲治, 加藤忠七, 上村佐七, 小佐佐作 (常陸処士), 藤本屋 (出身地不詳) 等の名が見られる。

4.

オルチユス学院は, 1828年 (文政11), オルチユス氏によって創設された^(註11)。彼の直接の経営は1870 (明治3) まで続いたが, 一時は, トルコ人留学生が数多く在籍していた。その後は1905年 (明治38) まで, キリスト教義普及会の学院として存続する。

同学院は初等教育課程を含む、中等教育機関であったが、小野政吉が入学した頃の私立学院 (Institution privée) とは、制度上、どのような位置に置かれていたのであろうか。

一般に中等教育機関は、四種類の施設が並存していたが、私立学院の学習年限はリセやコレージュより短いものであったようだ。その概要は次の通りである。

- 「 a ^{リセ・デタ} 国立リセ——学習年限を六年とし、文法学級二年、古典学級二年、修辞学級一年、および数学級一年を含む。
 b 中学校、すなわち ^{コレージュ・コミューネ} 公立コレージュ——リセより狭い範囲の教育をおこなうものである。
 c ^{アンスタチュシオン・プリヴェ} 私立学院——その教育は中等教育期間のはじめの四か年に限られる。
 d ^{バンシヨナ・プリヴェ} 私立寄宿学校——これは文法学級しかもたない。」^(註12)

さて、政吉はこの学院に通算八年間在学することになるが、ここでの授業内容、および寄宿舎生活は、一体どのようなものであったのであろうか。この問題に関しては、彼は何んらの記録も残していないので、明言は避けねばならないが、ある程度の推測は可能であろう。

何故なら、フランスのマリア会系学校・スタニスラス (Collège Stanislas, 22 rue notre-dame-des-champs, à Paris)^(註13)の東京校ともいべき暁星学校 (Ecole de l'Etoile du Matin) が、明治21年 (1888) に創立されたが、ほぼ全面的にフランスの教育方式が導入されている^(註14)。その点を考慮に入れるならば、設立当初の暁星学校を通して、オルチュス学院の授業内容や寄宿舎での生活を類推することは、そう的はずれではないと考えられる。

なお、暁星学校は前述の如く、パリのスタニスラス高等中学校を手本にして創立されたので、最初は中学校が設立された。その後、許可を受け小学校が附設されたのは、明治23年 (1890) のことであった。

そこで、同校の設立順序に従って、中学校の資料を要約してここに記してみると、次の通りである (原文は仏語であるが、筆者が和訳。小学校の部も同じ)。但し、我国特有の学科目 (日本語および漢文等) はオルチュス学院の学科内容とは直接関係がないので、削除したことを付記する。

I 中学校 (五年制)^(註15)

倫理 (第一学年から第三学年まで開講)

第一外国語 (フランス語, 全学年開講。以下同じ)

第二外国語 (英語あるいはドイツ語, 全学年)

古典語 (ラテン語, 全学年)

哲学初歩 (第四学年)

理財学初歩 (第五学年)

歴史 (全学年)

地理 (全学年)

算術 (第一学年から第三学年)

代数 (全学年)

幾何 (全学年)

三角法 (第四学年, 第五学年)

物理 (全学年)

化学 (第三学年から第五学年)

博物 (全学年)

簿記 (第五学年)

測量 (第五学年)

習字 (全学年)
 図画 (全学年)
 唱歌 (全学年)
 体操 (全学年)

さて、小学校の部に入ると、「明治19 (1886) 年4月の小学校令に続いて同年5月文部省令を以て『小学校ノ学科及其辞度』が制定された。これらによれば、小学校は尋常小学校4年、高等小学校4年の2段階であり、学齢児童は6歳から14歳までである」^(註16)。暁星もこの省令に準拠すべく、学科目等の計画書を作成している。

Ⅱ 尋常小学校 (四年制)^(註17)

修身 (週におこなわれる授業数、各学年1時間。以下同じ)
 第一外国語 (フランス語, 5時間)
 第二外国語 (英語, 5時間)
 算術 (5時間)
 歴史 (1時間, 2学年から開講)
 地理 (1時間, 2学年から開講)
 実物教育 (理科の初歩) (1時間。開講学年は明記せず)
 習字 (2時間。同上)
 図画 (1時間。同上)
 唱歌 (1時間。同上)
 体操 (2時間。同上)

Ⅲ 高等小学校 (四年制)^(註18)

倫理 (授業時間数、各学年1時間。以下同じ)
 哲学初歩 (第三, 第四学年に開講, 各2時間)
 第一外国語 (フランス語。第一学年から第二学年, 5時間。第三学年, 第四学年各4時間)
 第二外国語 (英語。第一学年から第二学年, 5時間。第三学年, 第四学年各4時間)
 歴史 (第一学年のみ1時間。他は2時間)
 地理 (全学年1時間)
 算術 (第一学年, 2時間。第二学年, 第三学年, 各1時間)
 代数 (全学年1時間)
 幾何 (第一学年, 1時間。その他は各2時間)^(註19)
 簿記入門 (第二, 第三, 第四学年で開講, 各2時間)
 物理 (第二, 第三学年各1時間。第四学年, 2時間)
 化学 (第三学年, 1時間。第四学年, 2時間)
 博物 (各学年1時間)
 習字 (第一学年から第三学年, 各1時間)
 図画 (各学年2時間)
 唱歌 (各学年1時間)
 体操 (各学年2時間)

IV 寄宿舎での生活

前述の様に、小野政吉はオルチュス学院での寮生活の記録を全く残していない。しかし、幸いなことに、暁星学校設立当初の卒業生が、この間の事情に触れた貴重な文章を発表しているので、ここに記し参考にしてみたい。おそらくオルチュス学院と暁星学校の間に、それ程の大きな差異はなかったものと思われる。実際、この卒業生は同文中で「…其時は母校と関係のある伯父の勧めに依っていよいよ中学科の一年の第二学期（正月）から入学した。附添って来て呉れた伯父は耳でなら佛語が解るからヘンリック校長は佛語でペラペラと話される一方校長は当時は耳でなら日本語が解るから伯父は遠慮なく日本語で話し答える。間に立たされる乃公は此二人の間の会話が実に不思議で不思議で堪らず、唯呆然として二人の顔を見比べてみた…銘々が全く別な言葉で話して、之でどうして意味が通じるだろうと驚き怪しむと同時にこんな心許ない変挺な談判によつて此コワイ異人の手に引取られ、アノ譯山の異人の兒と一所に置かれるのかと心細いやうな悲しいやうな思ひに涙ぐんだのである。入学を許されてモアイヤンに編入され、自習室に座席を定めて貰った。監督はゴージェ先生とフレグル先生であった。見るもの聞くもの一として珍らしく不思議ならぬはなく、宛で外国に留学してゐたやうな気がした」^(註20)、と当時の雰囲気伝えてくれている。

さて、寄宿舎での生活であるが、朝は夏冬を通じて五時半に起床。そして、「朝の自習は七時半迄、夫から食事、八時から授業が二時間続いて、十時から三十分間遊戯、十時半から十一時半迄授業、十二時迄昼食、十二時から一時まで遊戯、一時から四時まで授業、夫から四時半迄遊戯、四時半から六時まで自習及び入浴、六時半まで室内遊戯、後一時間自習があつて夜食と云う時間の配当であつた…」^(註21)。

さらに、「七時半が鳴ると例の一行進で浴室の前のヴェランダを無言で通つて食堂に入る。ランプの灯影に中小組の弟連と一処に会食をする此夕食が一日の中で一番家庭的で嬉しかった。此処で計りは日本語が勝手であつたから饒舌るは饒舌るは終日の腹膨るる業を一度に詰換へるのだから大変である」^(註22)。そして八時は就寝、これが一日の日課であつた。

V 教科書

オルチュス学院ではどのような教科書が使用されていたのであろうか。大変有難いことに、当時この学院で用いられた書籍が数冊現存するので^(註23)、政吉が「賞品授与式」(Distribution des prix)で授与された本を紹介しておくことにする。

なお、報告した書籍に関しては、記述の便宜上、以下の順序に従つたことを付記する。

- ① 著者 ② 標題紙 ③ 構成 [表紙 (形態, 色)], 寸法 (縦×横), 出版年 (刊行場所, および出版社) ④ 頁数

(A)

- ① M. Sainte-Beuve.
- ② Fables / de / Florian / suivies de / Son Théâtre / précédées / d'un jugement par la harpe / Et d'observations littéraires.
- ③ 表紙はバラ色 (校章が描かれ, その中央に Institution Hortus の文字有り。背表紙は革表装)。表紙の裏に長方形の紙片が貼られており, そこには次の様な内容が記されている。
Institution Hortus / distribution des prix / classe de 8^e / Division / 1^{er} Prix d'Analyse /

Décerné à Ono Massa / Le 9 Août 1876 / Le chef d'institution / (signature illisible).
18.3cm×12cm, 1874 (Paris, Garnier frères, Libraires-éditeurs)。

④ 477頁。

(B)

① Par C.A. Walckenaer, membre de l'institut.

② Fables / de / La Fontaine / nouvelle édition / revue et accompagnée de notes / Tome premier.

③ 表紙は赤色 (校章が描かれ, その中央に Institution Hortus の文字有り。背表紙は濃い赤色で, 背文字有り)。表紙の裏には, 長方形の紙片が貼られており, その内容は次の通り。
Institution Hortus / distribution des prix / classe de 6^e / Division / 2^e Prix de Version grecque / Décerne à Ono Massa / Le 7 Août 1878 / Le chef d'institution / (signature illisible). 21cm×13.7cm, 1826 (A Paris, chef L. de Bure, Libraire, / Nepveu, Libraire)。

④ 349頁。

(C)

① Daniel de Foë.

② Aventures / de / Robinson Crusoe / par / Daniel de Foë / traduction nouvelle / Illustrations de Grandville / nouvelle édition

③ 表紙は紺色 (校章が描かれ, その中央に Institution Hortus の文字有り。背表紙は革表装で, 活字有り)。表紙の裏には, 長方形の紙片が貼付, 記されている内容は, 次の通り。
Institution Hortus / distribution des prix / classe de 8^e / Division / Prix d'Exemptions / Décerné à Ono Massa / Le 9 Août 1878 / Le chef d'institution / (signature illisible).
18.3cm×12cm, 1875 (Paris, Garnier frères. Libraires-éditeurs)。

④ 432頁。

これ等の教科書によって明らかになったことは, 第何学級においては, 如何なる科目が学ばれていたのか, 認識することが出来たことである。例えば, 上記の(A)では, 政吉が第八学級 (classe de 8^e, 小学校4年相当) の時に, フランス語文法の分析 (1^{er} Prix d'Analyse) において, 優秀賞第一等の賞状を得ていることを意味している。

(B)に関しても説明しておくが, 政吉が第六学級 (classe de 6^e, 中学校1年相当) の時, ギリシヤ語の翻訳 (2^e Prix de Version grecque) で, 優秀賞第二等の賞を獲得したことを物語っている。

(C)は, (A)と同様に小学課程において, 賞状を貰ったことを表わしているが, Exemptions という単語が今一つはっきりしない。当時の慣習が明らかではないので, 断言は許されないが, おそらく, 「学業の優良証」又は「特別賞」(処罰免除の特典つき) の意味であろう。

こうして政吉は, オルチュス学院の生活に慣れていくが, 彼の年齢やフランス語の能力を考えれば, その苦労は察するに余り有る。その上, 明治7年 (1874) の末には, 小野組の瓦解事件が突発したため, 翌8年 (1875) には政吉は経済的問題にも遭遇する。幸いなことに, 蜂須賀駐仏公使の斡施により, 中途帰国することなく, 留学は継続されたのであった(註24)。

5.

小野政吉はオルチェス学院を卒業して、リヨン高等商業学校 (Ecole supérieure de Commerce de Lyon) に進学する。時に1880年 (明治13) の秋のことであった。

同校に関しては、小野吉郎氏より資料の提供がなされたので、ここに記してみると、以下の様な学校であったという。

「リヨン商科大学 (Ecole supérieure de Commerce de Lyon, 略して ESCL) は1872年に商都リヨンのリヨン商工会議所によって本部建物の中に設立された学校である。パリのHEC商科大学より8年先につくられた。設立以来、リヨンの有力企業の経営者が出資したばかりでなく、直接教えていた。たとえば、ユーリス・ピラ、ギー・ジャコブ、等の実業家は直接教えていた。特にピラー族は日本とも関係が深く、1887年にピラ商会の支店を横浜においた。親日家の一族で、駐日大使、リヨン日本名誉領事、駐日大使館武官夫人等があらわれた。

サント・エチヌの鉱山大学がナポレオン戦争での敗戦の翌年に設立されたように、普仏戦争の敗戦の翌年にリヨンの商科大学が開校した。リヨンと同じ頃、ルアーブル、マルセイユ、ボルドー等貿易港のある大都市にもそれぞれ商科大学がつくられた。

政吉は1880年に入学して、1882年に卒業した。一般商学と銀行実務を学んだ。商学、商法、銀行論、貿易論、貿易地理学等を学んだ。

当時は、34 rue de la charité, 現在の繊維歴史博物館の建物内にあったが、その後創立百年を記念してリヨンの市内から、北効のエキュリー (Ecully) の23 avenue Guy de Collongue の広大な近代的キャンパスに新築移転した。そして、CESMA (Centre d'Enseignement supérieur au management) を新設した。Lyon Graduate School of Business Administration という英語の正式名称もある。ここで国際企業が求めるMBAの資格が取得できるようになった。」

参考までに、現代の高等商業学校の教育はどのように行われているのであろうか。一例として、ルーアン高等商業学校 (L'Ecole Supérieure de Commerce de Rouen) を取り上げてみると、以下がその学科目である^(註25)。

Première année :

- introduction à la vie des affaires et des entreprises,
- acquisition des connaissances de base, des méthodes raisonnement et des comportements,
- Stage à l'étranger.

Deuxième année :

- application des connaissances de base,
- acquisition des techniques de gestion,
- développement des aptitudes.

troisième année

- Stage de gestion dans une entreprise.
- Tronc commun :
 - synthèse des enseignements de gestion,
 - entraînement à la prise de décision,
 - élaboration de politiques.

Quatre Orientation d'Options :

- Gestion Commerciale
- Gestion Financière (dont l'option finances comptabilité)
- Gestion Générale
- Gestion internationale.

さて、リヨン高等商業学校を卒業した小野政吉は、フランスでの学業は一応修了することになる。この後の政吉の活動に関しては、本稿の主題とは離れるので、簡単に記すだけに止めるが、残された資料によれば、最後までフランスとの関係が深かったことを物語っている。

明治15年(1882)、10年ぶりにフランスから帰国してのち、東京専門学校(現早稲田大学)に入学^(註26)。日本語を学ぶ目的だったともいう。翌20年(1887)、横浜正金銀行(Specie Bank de Yokohama)に入行するが^(註27)、同28年(1895)にはリヨン支店に転勤になる。その3年後の明治31年(1898)に支店長に就任した。

大正10年(1921)、三男・敏郎がフランスでの学業を終えたのを契機に帰国すると、東京の日仏銀行に再就職し、日本側の総支配人となった。また、日仏会館の設立に際しては、評議員の一員として名を連ね、日仏交流の分野での活躍を期待されたが、残念にも小野政吉は死去する。時に大正14年(1925)7月のことであった。

6.

小野政吉の子息・敏郎(1900-1941)について述べるわけであるが、彼の生涯に関しては、直系である小野吉郎氏の記述に譲り^(註28)、本稿では主題通り、敏郎のフランスでの研鑽のみに限定して報告することにした。

小野敏郎は1900年(明治33)、リヨンで誕生した。父・政吉の三男である^(註29)。一時、両親に連れられて帰国。その後、リセ・アンペール(Lycée Ampère, 31 rue de la Bourse)^(註30)での課程を終了し、バカロレア取得後、高等専門学校(Grandes Ecoles)の受験準備のため、特別クラス(classe préparatoire)を持つ、リセ・デュ・パルク(Lycée du Parc, 1 boulevard Anatole France)に入学する^(註31)。1917年(大正6)のことであった。その2年後の1919年(大正8)、難関の国立サン・テチエヌ鉱山学校(Ecole nationale des mines de Saint-Etienne)に合格する。

なお、同校に関しては、小野吉郎氏が調査をしており、その内容は次の様なものであるという。「パリの鉱山学校はフランス革命をまたずに1783年に化学者で鉱物学者のバルタザル・サージュ(Balthazar SAGE)によって設立された。これに対してサント・エチエヌの方はナポレオンが退位したあとの1816年にボニエーによって設立された。パリでは工業政策や工業経営の理論に重点をおき、サント・エチエヌでは、もともと地元が炭坑地帯なので、現場主義の技術実習に重点をおくにてきしていた。

まず入試をうけるための資格としてリセの課程を終了し、バカロレア前期に合格すると、2年間の『数学特別学級』を経て、バカロレア後期に更に合格した者に限られる。19世紀初めにバカロレアの制度ができたが、理系のバカロレアは1900年になって独立した。小野敏郎の受験当時は、フランスの南半分ではリヨンのリセ・アンペールから1914年に分離独立したリセ・デュ・パルクだけだった。

サント・エチエヌは当時入学定員40名、現在は160名。第一次大戦中はほとんど学生を募集しなかったから、復員兵と現役生の若い志願者とを合わせ激烈な受験競争だった。

履修科目は、数学、物理、化学、鉱物、採鉱冶金、採炭、構内施設、機械工学、金属工学、材料力学、蒸気機関、抗内実習、工場実習等。

卒業生は学士ではなく、文官鉱山技師 (Ingénieur civil des mines) の称号を当時は建設大臣 (現在は工業大臣) から授与される。敏郎の卒業当時はパリとサント・エチエヌの卒業生は対等関係にあった。ところが、その後石炭が斜陽化し、一方パリへの中央集権制がより徹底した。現在サント・エチエヌは石炭に代わって、石油化学、有機化学、原子力工業等に重点が移る。最近では情報科学、エネルギー政策、環境工学等にも力をいれている。

この学校は創立から1931年まで、19 rue du Grand Moulin にあった。1931年以後現在地、158 cours Fauriel の新校舎に移り、旧校舎跡には Maison des Ingénieurs が建っている」

1921年 (大正10) にこの鉱山学校を修了し、帰国の途につくことになるが、卒業証書の主要な個所を記してみると、次の様なものである^(註32)。

République française / Ministère des travaux publics / Ecole nationale des mines de Saint-Etienne / Diplôme d'Ingénieur civil des Mines /

Accorde le Diplôme d'Ingénieur civil des Mines de l'Ecole de Saint-Etienne à M. Ono, Tociro / né le 19 Avril 1900, à Lyon (Rhône) / Délivré à Paris, le 26 Décembre 1921 /

Le Ministre des Travaux publics, Signé (illisible).

ところで、敏郎はフランスの学校時代に、どのような書物を読んでいたのでしょうか。フランスの高等専門学校卒業程度の者であれば、その蔵書も想像出来るところである。しかしながら、関東大震災、第二次世界大戦等のために、書籍の大部分を失ってしまった。それ故、現在残存するものは少数であるが、それ等をここに示してみると、次の通りとなる。但し、煩雑のなるのを避けるため、書物名のみを記しておく^(註33)。

- (A) Grammaire française / cours moyen.
- (B) 1913 (Vingtième année) / Almanach Hachette / petite encyclopédie populaire / de la Vie Pratique.
- (C) XVIII^e siècle révolution empire (1715~1815).
- (D) XIX^e siècle (1815~1900).
- (E) Paul et Virginie / suivi de / La chaumière indienne.
- (F) Charles Baudelaire / Les Fleurs du Mal.
- (G) Chateaubriand / Récits, Scènes / et Paysages.
- (H) Les / mille et une nuits / contes arabes / choisis / pour la jeunesse.
- (I) Les contes / de / Perrault.

(J) Nouvelles / de / Alfred de Musset.

7.

前章では小野敏郎のフランスでの学歴、それに蔵書等を述べてきたが、やはり最終的には、彼のフランス語の実力が知りたいところである。敏郎のフランス語には定評があり、それを裏付ける資料も有るが^(註34)、やはり直筆のものが望まれる。

幸い、彼自身の筆になる書簡が数通残されているので^(註35)、ここに記し、敏郎の仏語表現力を窺う一端にしたい。

なお、文体は平易であり、その上、達意な文章なので、あえて訳文は付さず、手紙の背景などを説明するに止めた。

ST GOTTHARD

ZURICH, le 22 janvier 1936.

HOTEL

ZURICH

Ma jolie aimée,

J'espère que tu te portes bien, que tout marche comme il faut à la maison, que notre petit Yoshio est guéri et que rien ne te tourmente.

Nous sommes bien arrivés à Zurich lundi matin et les épreuves de tir se sont très bien passées. Hier je suis allé avec l'ingénieur de la Marine qui est avec moi, à Neuhausen, près de Schafhouse, tout près de la frontière allemande. Il y a là une grande usine que nous avons visitée et en bas de cette usine, la fameuse chute du Rhin qui est une des choses les plus connues de la Suisse (tu peux demander à Alice). Le Rhin tombe de 25 mètres sur une largeur de 100 mètres et on peut aller tout à côté de la chute. Un ingénieur de l'usine nous y a conduits et nous a fait voir très en détail. Nous avons eu un temps exceptionnellement beau.

Ce Monsieur de la Marine est parti hier soir et aujourd'hui, jusqu'à demain après-midi, je suis seul. Je ne reste pas pourtant inactif, je suis allé ce matin à l'usine Oerlikon pour discuter de diverses questions, j'ai aussi téléphoné à Neuhausen pour parler de choses que je ne pouvais pas dire devant l'ingénieur de la Marine.

Tout va bien, je ne tousse pas trop mais mes souliers neufs me font assez mal. Je viens de déjeuner à l'hôtel et la nouvelle montre que j'ai enfin achetée hier soir marque 1 h. 15. Vers 2 h. j'irai me faire couper les cheveux.

Je pense toujours pouvoir être rentré à Paris samedi matin. Ce n'est pas amusant d'être seul. Si tu pouvais être avec moi, comme ce serait bien mieux. J'ai hâte de te revoir et de baiser tes lèvres.

A bientôt, ma chérie, je t'aime. Embrasse bien notre petit Yoshio pour moi.

(Signature illisible)

(スイスのチュリッヒから、パリの妻あての書簡。当時、フランス語に精通してなかった妻のため、平易な文章で書いたものと思われる。)

Neully, samedi 25 mai 1940.

Ma chérie,

J'ai su que vous étiez partis tous les deux dans de très bonnes conditions et j'espère sincèrement que vous arriverez à Biarritz aussi bien que vous êtes partis.

Je fais partir aujourd'hui un colis postal avec ton manteau et tout ce que tu as laissé. Garde soigneusement le carton et le papier goudronné; je te demanderai peut-être de me les renvoyer pour de prochains envois.

Aujourd'hui, j'ai travaillé au bureau jusqu'à 2 heures, mais je pourrai me reposer cet après-midi et dimanche.

Tout est très calme aujourd'hui et j'espère que vous pourrez revenir vite tous les deux. Je pense que Yoshio est bien sage et qu'il m'écrira quelquefois.

Je pense que ton installation te suffira là-bas. Si vous trouvez l'hôtel trop mauvais, je pense que vous pourrez vous concerter pour trouver quelque chose de mieux.

Embrasse bien Yoshio pour moi. Comment trouves-tu Biarritz?

Je t'adore.

(Signature illisible.)

(ドイツ軍のフランスへの侵攻に際して、日本人家族はビアリッツに避難した。パリに残留していた敏郎も6月にはボルドーに避難する。当時、フランス国内では郵便の検閲が行われ、手紙文は仏文でないと通らない事情があった。それ故、たとえ日本人同志でも通信は、仏文である必要があったが、その検閲も1940年頃には、それ程厳しくなくなっていたらしい。)

Neuilly, 1^{er} juin 1940.

Mon cher petit Yoshio,

J'ai été très content de recevoir ta lettre hier (n'oublie pas de mettre la date). Je suis très heureux de savoir que tu travailles tous les jours bien régulièrement et que tu t'amuses bien aussi. Il faut faire tous tes efforts pour tâcher de passer ton examen, au mois de juillet, mais aussi rester en bonne santé et être sage avec maman, ne pas la tourmenter. En temps de guerre surtout, chacun grand ou petit doit faire tout ce qu'il doit faire et pour toi c'est surtout d'être un bon petit garçon. Je pense à toi continuellement, surtout quand je suis à la maison, car la maison sans maman et toi est bien triste. Mais j'espère que tout cela sera bientôt fini et que nous serons à nouveau réunis tous les trois très prochainement. Je pense comme la chanson:

"Si ça ne va pas tantôt,

Ça ira mieux demain."

Embrasse bien maman pour moi. Je t'embrasse bien aussi. A bientôt.

Papa.

(子息・吉郎宛の書簡)

Neuilly, 4 juin 1940.

Madame Uyeno a-t-elle reçu le télégramme disant que nous sommes tous indemnes?

M. (.....) a aussi télégraphié à sa femme.

Ma chérie,

Je ne t'ai pas écrit bien longuement hier, car j'ai été très occupé et nous avons tenu notre conseil habituel du 3 du mois chez M. Uyeno qui nous fait dîner chez lui (les restaurants ferment à

10 h. 1/2). Comme tu l'as vu dans les journaux, Paris a été bombardé hier. J'étais en train de déjeuner quand les sirènes ont retenti, mais Yvonne et moi nous sommes restés; j'ai fini de déjeuner assez tranquillement. On a entendu très distinctement le bruit des moteurs; je n'ai vu aucun avion (je n'ai naturellement pas ouvert la fenêtre pendant l'alerte; j'avais gardé mon masque à gaz près de moi). J'ai entendu de nombreuses détonations mais pas très fortes, en général; je croyais que c'était la D.C.A.. L'alerte s'est terminée une heure après, et je ne pensais pas qu'il pût y avoir tant de dégât produit en un temps si court. M. Uyeno est allé voir hier et ce matin les endroits atteints; cet après-midi il m'a emmené voir quelques-uns des points touchés; je ne peux pas te dire où pour le moment. Il y a des dégâts considérables mais je n'ai pas observé la moindre agitation parmi la population. Paris est admirablement calme. Je crois qu'aucune bombe n'est tombée à Neuilly.

Le bureau a enfin trouvé un local à Bordeaux pour y aller en cas de nécessité. Voici l'adresse: 17 bis, rue Scaliger, Bordeaux. Il n'y a aucun meuble, c'est seulement une grande pièce et un hall, partie d'hôtel particulier. Je crois qu'il y a l'électricité; il n'y a ni téléphone ni W.C. Rien n'est encore prévu pour le logement, sera-ce en hôtel, en pension, en appartement? On ne sait rien du tout. Dès que tout sera un peu débrouillé, il est probable que M. Yoshii et son service iront d'abord, car ils ont besoin pour travailler de beaucoup de registres et de papiers et on ne peut pas songer à ce qu'ils les emportent précipitamment. Il avait été question que M. Wakebayashi et moi partent d'abord (M. Uyeno et M. Ichikawa restant jusqu'à la fin), mais j'ai actuellement en train une affaire très importante et très intéressante aussi du reste qui fait que je ne peux pas quitter Paris immédiatement.

Si je suis obligé d'aller à Bordeaux, je crois que je tâcherai de garder l'appartement de Neuilly aussi longtemps que je pourrai. Je demanderai à Yvonne d'y rester, je pourrai peut-être par la suite lui demander de venir à Bordeaux: je verrai. Je vais tâcher de finir de faire les paquets; il y a encore pas mal à faire. En tout cas je vais faire dégraisser ta robe de chambre et ton tailleur vert.

Madame (.....) est venue me voir ce soir: elle a reçu ta lettre à laquelle elle a déjà répondu, mais elle voulait me demander conseil car elle ne peut pas aller à Biarritz ce mois-ci, car elle a encore plusieurs élèves à son cours de droit, qu'elle ne peut pas abandonner juste avant l'examen.

Je crois que M. Ichikawa ne savait pas que sa femme était aussi sérieusement malade surtout avec un abcès. C'est par la réponse de M. Hori à notre lettre de remerciements qu'il a su que sa femme devait garder la chambre. Jusque là, il croyait seulement Sumiko malade.

Je n'ai toujours pas de réponse du dr. (.....). Je crois qu'il doit être très occupé actuellement. Tu pourras certainement demander à ce docteur Clavel de vacciner Yoshio et de lui donner un certificat.

J'ai bien reçu-j'ai oublié de le dire mais tu l'as deviné, puisque les 2 paragraphes précédents n'auraient pu être écrits sans cela-ta lettre du 2 juin et la gentille carte de Yoshio. Dans un jour ou deux, j'enverrai le linge demandé et je joindrai les autres qu'il demande.

C'est tout pour aujourd'hui. La suite à demain.

Embrasse bien Yoshio, soigne-le bien.

Je t'embrasse très tendrement.

(Signature illisible)

Ne t'inquiète pas pour ma santé, je vais aussi bien que possible.

PS. Je ne sais pas si M. Yokogawa est bien à Bordeaux. Il est resté après le départ de sa banque, attendant son sauf-conduit.

(長文の書簡であるが、敏郎のボルドー行が決定したことを、妻に知らせる。)

Bordeaux, 8 août 1940.

Ma chérie,

Cette fois, c'est décidé. M.M. Uyeno (qui s'est enfin décidé), Wake et moi, nous irons samedi à Biarritz par le même train que moi, Yoshii et Hikawa, l'autre jour. Espérons que le train aura moins de retard. Nous allons faire prendre les billets, cet après-midi.

J'ai bien eu, hier soir, la carte de Yoshio (du 5 ? J'ai oublié la date).

Tout sera prêt à Caudéran pour la chambre; nous allons d'autre part demander à Mme Garrigue si elle peut s'arranger pour faire des repas à 5 autres personnes de bon appétit. (Rien n'est encore arrangé pour la chambre de Mme Uyeno, il y a des chambres libres un peu partout: chez Mme Garrigue, rue Scaliger (.....); M. Uyeno pense encore à des chambres d'hôtel)

Je serai tout de même bien content d'aller à Biarritz (après 27 ans) et de vous revoir tous les deux.

En attendant, je vous embrasse tous les deux bien tendrement.

A après-demain.

(Signature illisible)

(ボルドー避難中の敏郎が、ビアリッツに居る家族を迎えに行くという書簡。)

(註1) 小野吉郎「三代にわたるフランス学校教育体験」, 日仏教育学会年報1号 (N°23—1) 79頁, 1994年。

(註2) 『朝日・日本歴史人物事典』(朝日新聞社編, 1994年)によれば, 「本野一郎は明治6 (1873) 年フランスに渡航し, 9年7月までパリで修業。17年11月フランスのリヨン法科大に入学し優秀な成績をおさめた。22年7月法律博士試験に及第し…」とあるが, 現当主(本野盛幸氏)も祖父(一郎), 父親同様, フランスとの関係は深く, 氏自身はフランス大使を歴任している。

(註3) 宮本又次著『小野組の研究』第三卷(大原新生社, 昭和45年), 23頁。その他, 小野組に関しては, 主に同書を参照した。

(註4) 小野善太郎著『維新の豪商・小野組始末』(青蛙房, 昭和41年), 89頁。

(註5) 小野善右衛門の養子となり, 政吉と同じ様なフランス留学生活を送ることになった。

(註6) 重久篤太郎『お雇い外国人⑤——教育・宗教』(鹿島出版会, 昭和43年), 136頁。

(註7) 『小野組の研究』第四卷, 587頁。

(註8) 『維新の豪商・小野組始末』, 89頁。

- (註9) あるいは Godavéry (Nouveau Petit Larousse, 1968年版)。なお, 『Le Petit Robert 2-dictionnaire universel des noms propres』(1974年)によると, Godâvârî となっている。
- (註10) 拙著『幕末明治初期・フランス学の研究』(国書刊行会, 昭和63年), 454頁~479頁。
- (註11) “Dictionnaire historique des rues de Paris” Tome I, Hillalret, p. 132.
- (註12) アントワーン・レオン著(池端次郎訳)『フランス教育史』(白水社, 1969年), 71頁。
- (註13) 当時のスタニスラス学校については, “Prospectus de Collège Stanislas, collège particulier de plein exercice” (22, rue Notre-Dame-des-Champs, A Paris), 1858年版を参考にした。
- (註14) TANKA Sadao “L’Ecole de l’Etoile du Matin——un échange culturel franco-japonais” (Fukyosha, 1998).
- (註15) 暁星学校の史料は AGMAR (Archives Générales Marianistes, Roma) によって所蔵されている。中学校関係の史料は, “Plan d’études du 2^e degré (1889年)”を参照した。
- (註16) 森秀夫著『日本教育制度史』(学芸図書株式会社, 昭和59年), 48頁。
- (註17) (註15)に同じ。尋常小学校関係の史料は, “Plan d’études des classes préparatoires”を参照。
- (註18) (註15)に同じ。高等小学校関係の史料は, “Plan d’études du cours supérieur (1902?)”を参照。
- (註19) 第四学年の項目には, 7^e et 8^e livre と書かれているので, 開講科目にはなっているが, 時間数は明記されていない。
- (註20) 在仙台 木星「太古時代」(『暁星』第巻号, 暁星学校。大正元年), 34頁~35頁。
- (註21) 『暁星』第巻号, 39頁。
- (註22) (註21)に同じ。
- (註23) 小野吉郎氏所蔵。
- (註24) 『小野組の研究』(第四巻), 587頁。
- (註25) “Les dossiers de l’étudiant” (numéro spécial annuel, 1977~1978)。
- (註26) 明治19年4月15日入学と記されているが(記録編集部), 卒業した形跡はない。「校友会名簿」(東京専門学校, 明治30年12月調)には, 推選校友之部として, 「佛国里昂正金銀行支店内 横濱正金銀行役員 小野政吉 東京府」と明記されている。
- (註27) “Who’s who in Japan” (1912)。

- (註28) 小野吉郎「父・小野敏郎と日仏会館」(『日仏文化』(第58号), 日仏会館, 1994年)。67～77頁。
- (註29) その他, 政吉には長女(政子), 長男(長三), 次男(民二)がいたが, 東京で義姉の西村産(さん)が預かり, 世話をしていた。
- (註30) このリセは古い歴史を有し, 1519年, le Collège de la TRINITE として誕生。18世紀末から19世紀にかけて, Ecole Centrale となり, 1803年には, Lycée Impérial として設立された。現在の校名になったのは, 1888年(明治21)のことである。
 なお, リセ・アンペールも現在では, classe préparatoire (準備学級)を有しているが, その進路は, préparation au haut enseignement commercial の分野である。(Les dossiers de l'étudiant, 1977～1978)を参照。
- (註31) (註30)に同じ。この学校の準備学級の進路は多方面にわたっている。
1. classe de mathématiques supérieurs.
 2. classes de biologie mathématiques supérieures.
 3. préparation au haut enseignement commercial.
 4. préparation aux écoles vétérinaires.
 5. classes de lettres supérieures.
- (註32) 小野吉郎氏所蔵。
- (註33) 同上。
- (註34) 1925年(大正15)の2月27日の新聞記事(“L'OPINION” de Saigon, Indochine)に, 「Après un bref exorde dans lequel il s'excuse de ne pas pratiquer notre langue, le baron Matsuoka passe la parole à son secrétaire M.T. Ono, qui lira la Conférence en français.
 M.T. Ono, a fait ses études à Paris; il est demeuré très parisien. Il s'exprime dans notre langue avec une élégance que pourraient lui envier des Français,...」とある。
- (註35) (註32)に同じ。

本稿作成にあたり, 小野吉郎氏には色々ご教示を戴き, その上, 資料に関しても格別の協力があつた。ここに記し謝意を表するものである。